
紅き伝説

レッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅き伝説

【Nコード】

N0161Z

【作者名】

レッド

【あらすじ】

火災現場で死ぬ寸前に少女と出会い異世界へ

しかし能力もよくワラナイ主人公！

どうなるの？

そして運命の女神に愛される主人公の運命は！

ブローグ

俺の名前は高橋 俊。年は23才

さていまの状態を説明しよう。

高卒と同時に消防士になり何度目かのビルの火災現場。

別に危険な現場ではなかった。慣れたものだった。

命綱を付け、先輩と一緒に逃げ遅れが居ないか屋内に侵入したまでは良かった。

火災は大したことなく煙が凄いただけだった。そのため排煙をするべく先輩と離れ窓を開けに行ったのが思えば俺の運の尽き。

いや始まりか……………

先輩と離れ排煙をするべく窓を開けに行ったらまだ確認していない部屋を発見。

逃げ遅れが居ないか中を開けてみる。

部屋を探しても人は居ないか…窓も無いし部屋を出ようとして俺は目を疑った。

扉が無い！

おかしい、それにさっきはつつすらだった煙が濃くなり周りが見えない！！！！！！

なぜだ！やばい！

壁伝いに歩くも出口は見つからない……………

ジリリリリリリリリ！！！！

しまった呼吸器の残量があと僅かだ！！

呼吸器が渋くなってきた……………

もうダメか…………… 思えばいい人生だったのだろうか。

そういえば俺の周りは何時でも大変だったな……………

学生時代は、俺は成績は普通より上だったのに何時もクラスで悪く、
教師から怒られ消防学校でも同じ

他にもいろいろあったがもう呼吸器がやばいな……………

そんな時俺の前に花びらが

「サ…………ク…………ラ…………？」

何でここに？

そして目の前に1人の女の子

いや少女か……………

さっきは居なかったのになぜ？

少女「生きたい？」

ああ……………幻か……………

少女「生きたい？」

もうやばいな呼吸器の計器も0を指している。息もできない。

まあ幻にこんな言うっても仕方ないけど

「ああ生きたい、そして知らない世界を旅、いや冒険してみたかったよ」

そして、俺の意識は闇に落ちた……

1話

気づくとそこは先の見えない暗闇だった……………

「あれ？俺、死んだはずだよな？」

「いえ、まだ死んでおりません。」

「！！！！？」

突然の声に後ろを振り返ると先ほどの少女が立っていた。
いや美少女がいままで見たことない美少女だよ。

「あなたはまだ死んでおりません。あの時あなたは偶然にも神の領域に足を踏み入れてしまいました。」

「神の領域？あの扉が」

「ええそうです。本来なら入れないのにあなたは入ってしまった。それは世界のバランスを崩してしまうと言うこと、なのであなたは今この場所にいます。」

「もとの場所に戻れないのか？」

「不可能です。あの世界でのあなたは死にました。そして、神の領域に入ったあなたには別な世界に異世界に行ってもらいます。それが世界のバランスを保つためです。」

「はあ、バランスね……………」

「そうバランスです。しかし、そのまま 異世界に行くのはあまりに不憫だと神々が判断いたしました。」

「はあ」

「そこでこれです」

少女はいつの間にか白い箱を突き出したいや自慢気な顔で出されてもどつしりと……………

「この中に異世界で役立であろう能力が入っております。」

「はあ」

「一回引いて中のボールを一つお取りください。」

言われるまま箱に手を入れ中のボールを出す。

黒いボールが出てきた。

「なるほど、やはりあなたは面白い人ですね。では異世界に行つて貰います。」

「えっ！能力の説明は？」

体が白く粒子になつていく

「神々の決定では能力の説明は伝えてはならぬと決まっておりますので」

「えええっ！！！」

異世界行って能力が分からなくてどうしろと

しかし、もう体のほとんどが無くなっている。

「じゃあ君の名前だけでも！」

「運命の女神と他の神々からは呼ばれております。ではまた。」

そうして俺は異世界に旅立った。

運命の女神「やはりあの人は面白い。神の領域に入り、そして異世界での能力も………うふっ初めて人を好きになりましたわ。高橋

俊……面白い人………あの方なら私の夫に相応しいかも………
神と人、結婚してならないと言う決まりはないのだから………異
世界に行っても私を楽しませてね俊…あと能力からの他に私からの
餞別よ。」

そう言うとき女神は一振りの刀を取り出した。

「さあ、あなたはこれを使いこなせるかしら？」

そう言うとき刀が光に包まれて消えてた。

「さあ行ってらっしゃい俊！力を付けて神の領域に達しなさい。私
は応援してるわよ。」

運命の女神の独り言は闇に消えた………

1 話（後書き）

駄目文ですね

2話

「知らない天井だ………って違う!!!天井無いし空だし!」

ふう〜ボケはここまでで、夢ではないか………

しかし本当にここ異世界?

服も変わってるし………

これがさっき引いた能力か?いや服だし違うか。

先ほどの火災現場の防火衣の呼吸器フル装備とは変わって上が黒いTシャツ、したが黒いズボンにそして靴も黒い靴に変わっていた。

「黒尽くしですか………まあ黒好きだし別にいいか………」

さて見る限り草原だしどうしよう………

いや違うか………遠くに街らしきものが見える。

まあ取りあえず街に向かうか………

「うん？」

すると足元に刀が転がって居るのに気づく

「なんだこれ？いや刀か……しかしこれも黒いのね……」

何も無いよりましか………持っていくか。

こうして俺は街へ向かうのだった。

俊は刀を手に入れた。

「おおー遠目でもわかっていたが、やはり異世界？いやー中世ヨー

ロツパ的な感じだの」

街の入り口で俊は改めて異世界にきたと感じていた。

「さて、普通に入れるのかね？」

そう問題はそこである全身黒づくめの俺が街に入れるのか？身分証明とかできませんけど……………

「取りあえず行くか…」

変な所でポジティブな主人公であった。

街の入り口では案の定、門番らしき数名が検査を行っていた。

「次のもの！！」

門番に促され前出る。

「身分証明書はあるか？」

やはりかたか…

「あははは………ありません。やっぱりダメでしょうかね………」

「なんだ？お前、身分証明書が無いか？

」

ええいここは適当な嘘を

「ええ、この街は初めてでして。実は田舎から出てきたばかりで…

………」

行けるか？

「まあよい冒険者になりたいという田舎の若者がよく来るのでな…
…では街に入る為に税金100クールを収めて貰う。」

あれ？大丈夫だった………

うん？お金？

やべー金ねー！！！！しかも１００クールってなに？

取りあえず服をガサゴソ……………

うん？あれこんな袋あったけ？

取りあえず中を見してみる。

中にはよくわからないけど銅貨や銀貨が少し入っていた。

取りあえず前のおっさんが出していた銅貨を一枚だす。

「じ、じゃあこれで……」

「ウム！確かに。」

おおー合ってたみたいだ。

「では、ようこそリモーネの街へ。あとお前が冒険者になったら街に入る為の税金は無くなるぞ。良かったな坊主！」

ほーそうなのか……いいな冒険者。

その後なんとか無事、街に入れた。

しかし本当になんかネットゲーみたいな世界だな。さっきの門でも刀を注意されなかったし……

それに、エルフばい人や全身鎧の人、獣人？みたいな人がいる。帯剣してる人もちらほら

さてどうしよう……

さっきの門番のおっさんが言ってた冒険者になりに来る若者ね……
お金もあるにはあるけど無限じゃないし、あと銅貨9枚に銀貨か？
が5枚だし……

えっと……銅貨1枚が100クルだな。銀貨はその上だと考えてウーンドの位の金額がわからない。

とりあえず田舎から出てきた若者でもなれる冒険者になってみるか。

ってどこでなるの！！！！？

2時間後……………

「やっと着いた…」

最初に人に聞けば良かった！
観光気分でぶらぶらしてたら迷っちゃった。テヘ！

まあ迷ったおかげで貨幣の価値がわかったよ。買い物してる人をじっと人間観察してね。

まず銅貨これはさっき門番とのやり取りで100クール

次に銅貨の下、これが半銅貨これが10クール

半銅貨の下が雑貨、これは1クール

雑貨が10枚で半銅貨にさらに10枚で銅貨にさらに10枚で銀貨になるらしい……あれ？半銀貨ってないの？？

謎だ……………

ちなみに料理店や花屋とか色々なところで人間観察したけど1クールは日本円で一円みたい……………

現在の所持金5900クール

微妙～

このままだと不味いよ～いざ冒険者に……！

ガダン

冒険者になれると教えて貰った建物へ

酒場？みたいな所だな……………おっ！受付嬢みたいな人いるあの人に聞か！

「あのゝすみません、冒険者になりたくてきたのですけども…………。」

「ハイ！新規の冒険者の登録ですね。では名前をここにお願いいたします。」

おおゝこの世界の文字わからんよ！！！！

「あのゝ文字が書けません。」

「ハイ、大丈夫ですよそういった人もいますので」

よかった……

「では私が書きますのでお名前を。」

「俊っています。」

「ハイ、わかりました。トシ様ですね。」

といいながら紙に文字を書いて行く……………

うん？ローマ字？だよなおおーこれなら俺書けるよ、よかったー英語とか苦手だよー

「ではこのカードに血を一滴たらしてください。」

と受付嬢が手のひらサイズのカードとナイフ出してきた。

言われるままにナイフで血をばちっとな。

カードが淡く光る。

「ハイ、これで登録完了です。それでは冒険者の説明をさせていただきます。まず、そのカードはギルドカードと言います。身分証明書となりますので無くさぬように、またギルドカードにはその人の所属するチームやその人の能力などの個人の情報が入っていますので。」

へえ〜と感じながらカードに目を落とす。

トシ

ギルドランクF

筋力D+

耐久D-

俊敏E+

魔力F+

ほうほう…なるほどね。

「能力にもランクがあります。上はA+から下がF-筋力でいいま

すと、大体の男性の方がF+からE-ですね。一流の冒険者になりますとD-からD+でしようかBまでいきますと英雄の域ですね。」

ふん筋力高いな

うん？これが神からの能力か？

「ギルドでのランクなのですけれどもクエストをクリアして昇任クエストをクリアなさいますと上がります。またクエストによっては失敗しますと違約金が発生しますのでお気をつけください。」

「また二つ名などついたり特殊職業や神や精霊加護がつく場合はカード下や裏面に記載されます。」

へえと話をあまり聞かずにカードを見る

!!!!!!!!!!!!!!

なんだこれ

幸運 G -

えっ…………… A + から F - までじゃないのなにこれ……………

その後の受付嬢の話も聞かずに呆然とする俊だった……………

表面

トシ

ギルドランク F

筋力 D +

耐久 D -

俊敏 E +

魔力 F +

幸運 G -

裏面

運命の女神の加護

2話（後書き）

ウム

3話

刀

または日本刀とも言う。耐久性を捨て切れ味に特化したものともいおうか。

さてギルドで登録したのだがいかせん金が無い！
その為クエストを受注したのだが……………

「あゝ宿屋代聞いてくるんだっただ」

今回受注したクエストはゴブリンを3匹討伐だった。

ちなみにクエスト成功報酬は銀貨3枚の3000クール

宿屋代不明

日が暮れる前にと飯も食わずに急いできたのだが……………

肝心の宿屋代がわからん……………

野宿はイヤだよ……………

まあなるよになるか…

さて今回のクエストのゴブリンだが大体成人男性の身長の半分ぐらいで緑色のモンスターらしい

。

駆け出しの冒険者が狩る一般的なモンスターで亜種や希少種もいるらしい。

このモンスターを倒し、耳につけているピアスを剥ぎ取りギルドに持っていけばクエスト成功らしい……………

らしい、らしいと曖昧なのは受付嬢の話を聞いてなかったから

「ハア……」

なんだよ幸運G - って!!!

突き抜けてますけど!!!! 下に!

大丈夫なのこれ!

神から与えられた能力もわからんし、とりあえず今は今晚の宿屋をとる為にゴブリン抹殺だ!

えっと北の森によくいるんだだけ?

冒険者ギルド受付

受付嬢「あの人大丈夫かしら……話をお願いして聞いてなかったけど……間違っても1人で北の森に行つてないわよね……森の入り口はまだ大丈夫でしょうけど、奥には熟練冒険者のチームでも気を抜けないオーガだっているのに……」

「ここが受付嬢のねーちゃんが言ってた森かな？」

歩くこと2時間、森についた。

ではゴブリンを探しますか……………

拝啓

受付嬢のねーちゃんへ

ゴブリンって成人男性の身長的一半だよね……………

いま俺の前に居るのなに？

明らかに身長3mありますけど……………
なんか錆びた斧持ってますけど……………

あと口から涎がボタボタと……………

ヤバいんじゃないのこれ……………あーちゃんと話聞いているんだったー
と考えてるとモンスターが斧を振り下ろしてきた！

「うおっ！ー！」

なんとか避けたよ。

「クソ！ゴブリンの癖に……………」

色々間違ってます。ゴブリンではなくオーガです。

俺も負けじと腰に差してある刀を抜く……………

抜けない……………

「あれ？」

そういえばまだ一度も抜いてない！！！！

うおっ本当に抜けないよー！

これしかないのに！神からの能力の切り札なのに！！！！！！

「あっ！無理だよこれ！！！！」

とりあえず逃げる！！！！しかし悲しいかな、

俺の俊敏能力はE+

あの巨大ゴブリンも同じ位だよ……………

えっ！要するに

「逃げねー！！！！！！」

巨大ゴブリンと差は広がらず、縮まりもせず。
体力には自信があったが森の中では分が悪い！！！！

まだ追って来るのかと走りながら後ろを見ると……………

「増えてるー！！！！」

巨大ゴブリンが1匹から3匹に増殖！！！！

斧の2匹に棍棒1匹

なんと！ついてない！！！！！！

幸運G - は伊達じゃない！！！！！！！！

しかも疲れてきたよ。
俺詰んだか？

そんな走っている時目の前を桜の花びらが……………

「サクラ？」

キーン！！！！

「うおっ！抜けたよ！」

サクラと呼んで刀が抜けた？

もしかしてこれが神からの能力か？

この刀が名刀とかなのか！

と考えてながら急反転！

追いかけてきた巨大ゴブリン達は急に獲物が反転したものだから3匹絡み合い倒れる。

「チャンス！！！」

一番手前に倒れている巨大ゴブリンの頭に刀で突きを喰らわせる。

「ウーガーガガ……………」

と断末魔を上げてゴブリンが死ぬ……………

グロイが慣れてない訳では無い！！！！

近くで起き上がりそうなゴブリンに切りかかる！！！！

あれ？刀握るとき右手上だっけ？

どうでもいい！！！！

とりあえず目の前のゴブリンの腕を切り抜く！！！！

切り抜けない……………

なんだと……………この刀切れ味悪いぞ

途中で止まっていた刀を無理矢理力押し腕を半分に斬ってやった。
流石に筋力D+は伊達じゃないな…

「ウガー！！！！」

あれ怒った？

あれもう1匹は？
と周りをみた瞬間

「ゴフッ！」

ゴブリンの棍棒で吹っ飛ばされる。

とっさに刀で防いだが力を殺せなかったらしい……

しかし俺の耐久はD-！

一流だぜ！ゴブリンの攻撃でやられるはず……

ダメそう……

腕と頭から血が……

それにさっき棍棒を防いだら刀にヒビが……

ヤバい！本能でわかっていて立とうとしても立てない……

体もヤバイ、武器の刀も折れ欠け詰んだか……………

刀を杖に立ち上がろうとしたら俺の血が刀にべっとり…

カタ……………カタカタ……………カタカタカタカタ

なんだこれ刀が動き出したぞ!!!!!!

刀が淡くサクラ色に輝く。

なんと刀が治ってる！

しかも若干赤いぞいや紅いぞ！

しかしサクラ色に輝いて紅くなるなんぞこれ？

しかしゴブリンが空気を読んでくれたのはここまで2匹同時に雄叫びを上げて突っ込んできた。

刀は治っても体は治ってない…

避けれない……………

刀を眼前に構え迎え撃とうとすると

目の前にまたサクラの花びらが……………一枚ヒラヒラと

あっ！ゴブリンに当たった。

ズシャッ！！！！

なんとサクラの花びらが当たった所が斬れた！！！！1匹は倒れて、もう1匹は膝で倒れてる状態だ！

これなら……………行ける！

痛む体を無理矢理動かし膝立ちのゴブリンに野球のフルスイングのごとく刀を横から振るってやる。

グシャツと音を立て首と体が別れる。

もう1匹のほうは片腕が無くまだ立っていない。

立とうとしている。ゴブリンに先ほど同じ様に刀をフルスイングで入れてやる。

「グギギギ……………」

と声にならない声を上げて倒れるゴブリン。

「ふう〜やったか…しかしゴブリン強すぎ！俺もチーム組むか……………」

と愚痴を零してクエストを成功させる為耳のピアスを剥いて行く主人公であった。

3 話（後書き）

刀の花びらはブリーチの白哉の正解イメージで……………

うーん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161z/>

紅き伝説

2011年12月1日18時52分発行